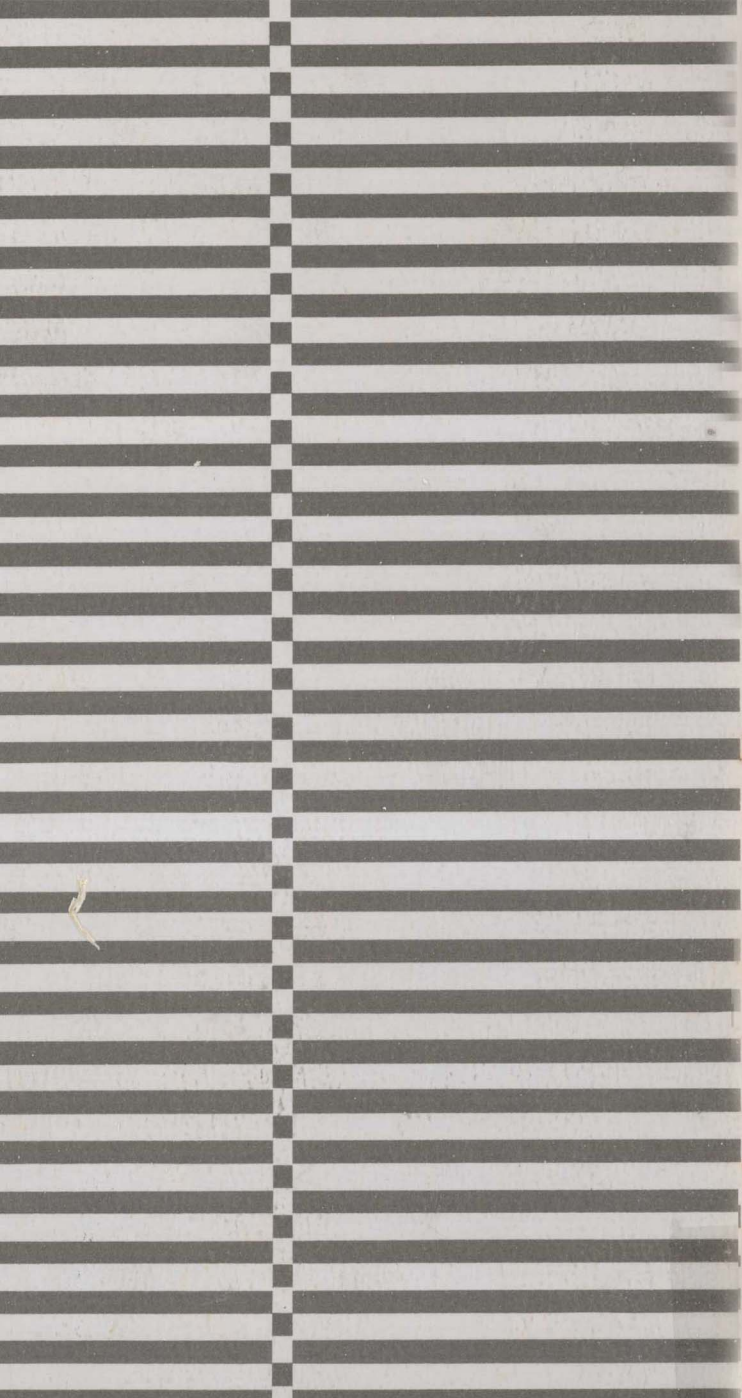
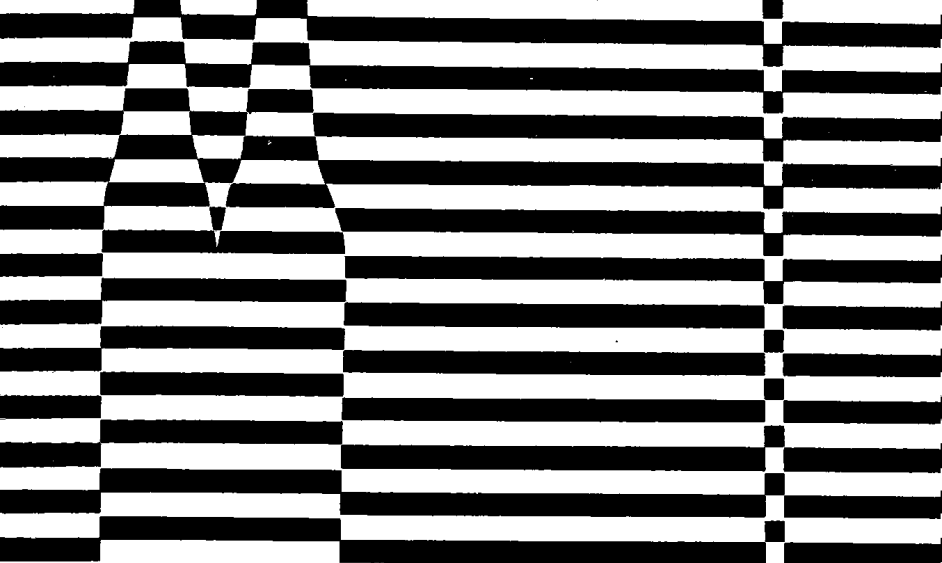


北方謙三

逆光の女





三逆光の女

三謙方北

角川書店



逆光の女

発行日——昭和62年 2 月28日 初版発行

著者——北方謙三

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店 〒102

東京都千代田区富士見 2 -13- 3

電話——営業 03-238-8521

編集 03-238-8451

振替——東京3-195208

印刷——大日本印刷株式会社

製本——株式会社宮田製本所

©Kenzo Kitakata 1987 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872461-4 C0093

逆光の女

装丁 荒川じんぺい

逆光の女

目次

第一章 雅子

七

第二章 ヘッドライト

二六

第三章 少女

二八

第四章 ハイウェイ・ブルース

三六

第五章 花束

三七

第六章 ギムレット

三九

第七章 小さなけもの

四三

第八章 日記

一四三

第九章 潰れた煙草

一四四

第十章 砂

一四五

第十一章 もの

一四七

第十二章 金属探知機

一四九

第十三章 化粧

一五一

第一章 雅子

1

金木犀きんもぎせの、強い香りが漂かたよっている。

夕方は肌寒はださむい季節になつていた。

物置からスコップと園芸用のシャベルを出し、私はシャツの袖そでをまくりあげた。陽ひが落ちるまでは、まだちよつと間がありそうだ。

緑の地衣ちいの上に、砂を撒まいたように木犀もぎせの花弁が散らばっている。位置の見当をつけた。木犀の根方から、ほぼスコップの柄えの長さの場所。昨年の暮とは、地衣の状態も変つていようだ。踏みしめると、絨毯じゅうたんのような感触が蹠あしうちに伝わってくる。

私は、地衣を裂くように、スコップのさきを地面に突き立てた。体重を乗せる。スコップは、半分ほど土の中にめりこんだ。起こした。木犀の香りの中に、土の匂においが入り混じつてきた。かなり深いところに埋めた。それに小さなものだ。私は乱暴にスコップを使つた。掘り起こした土を、木犀の根方に放り投げる。土はかすかに湿りを帯びていて、スコップのさきからみつくようだった。

時折、細い根が切れる感触が、スコップから伝わってきた。花が終ると、木は休眠期に入る。

春の新芽が出るまでは、土を掘り起こしてやるのはむしろいいはずだ。切れた根も、新しくなる。

穴が、次第に深くなってきた。水気も多くなり、土の塊がスコップから離れなくなった。スコップを地面に叩きつけるようにして、貼りついた土を落とさなければならぬ。

額に汗が滲み出してきた。シャツも、濡れて背中に貼りついていて、腕で眼のあたりを拭うだけで、私は構わず作業を続けた。

冬のさなかだというのに、埋めるために穴を掘った時は、もっとひどい汗をかいた。自分の気持の底にあるものまで、埋めようとしていたからだ。

スコップのさきに、堅いものが触れた。私は膝をつき、穴の中に腕を突っこんでそれを掴み出した。小石。埋める時に、小石のようなものは全部選り分けたはずだった。土の中で、石が動くことがあるのだろうか、となんとなく思った。掘って埋めた部分の土は軟らかいから、しめる時にまわりの小石が流れこんでくることがあるのかもしれない。

掌が痛くなってきた。昨年の暮も、すっかり軟弱になった私の掌は、内刺を二つ三つこしらえたものだった。

スコップを使うことを諦め、私はシャベルを握って土に両膝をついた。穴の縁に触れて、腕やシャツの袖が土で汚れた。頬を伝ってきた汗が、顎のさきから流れ落ちていく。

穴の底をシャベルで掻き回しては、少しずつ土をあげていった。シャベルのさきがなにかに触れるたびに、手を入れて指で確かめてみる。深さは、これぐらいのはずだ。

一度、立ちあがって腰を伸ばした。陽が落ちようとしている。晴れた日だった。薄闇にも、どこか透明な感じがある。

ジーンズの膝もシャツも、泥だらけになっていた。遊びに熱中している子供とでもいうところだ。煙草を一本喫った。その間にも、闇は少しずつ濃さを増していった。

もう一度、穴の縁にしゃがみこんだ。すぐに、シャベルのさきになにか触れてきた。小石の堅い感触とは明らかに違っている。土に埋もれて腐った木。それよりいくらか堅い感じかもしれない。力を入れてシャベルで突くと、簡単に毀れてしまいそうな氣もした。

まわりの土を、少しずつシャベルで掬いあげた。それから手をつき、指さきでまさぐった。思ったほど、大きくはなかった。縮んでしまった。そんな感じがしたほどだ。

指さきで、しっかりと握むことができた。穴の底から剥がれるように、それは土から離れた。小さな塊だった。窓からの光に翳しても、土くれにしか見えなかった。

よう、と私は声をかけた。指さきで表面の土を落としてみる。白い色は現われなかった。

2

雅子と最初に会ったのは、去年の春だった。

横浜の小さな酒場。少女のような印象だったが、二十四だと言った。酒は大して飲めないようだった。薄い水割りで、時々口を湿らせていただけだ。

「水曜と金曜だけなの」

帰り際にそう耳打ちしてきた。ほかの日は店に出ていない、ということらしかった。昼間も、仕事を持っているようだった。

次の週の金曜日に、私は出かけていった。

「この間とずいぶん違う。お酒、飲めなくなっちゃったの？」

バーボンのストレートを、二杯ひっかけただけで、私は飲むのを控えた。この間は、少なくともボトル半分くらいは飲んだだろう。

雅子は、長い髪を指でかきあげながら、何度も私のグラスにウィスキーを注ぐとした。髪に触れた時の指の仕草が、どこか神経質で忙しなかったが、それ以外の举止は大人しやかだった。笑うと寂しそうな顔になる。

「車を転がしてるんだ。これ以上飲むと、スピードが抑えられなくなる」

「はじめから、言ってくださればいいのに」

「知っていて飲ませたら、そいつも同罪だぜ」

女の子が三人いる店だった。私の係りは雅子ということになったようだ。

「送ってやるぞ」

看板間際に、私は軽い情欲に衝き動かされて言った。曖昧に、雅子は頷いた。店の外に車を回して待っていた。

「なんという車、これ？」

私を認めてちよつと困惑した表情を浮かべた雅子が、車の方に眼をくれた。

「乗ってみりゃわかる」

強引な誘いだった。助手席の側のドアを開けた。乗りこんできた雅子が、軽い声をあげた。凝ったインテリアのイタリア車だ。

タクシーの間を抜けて、高速道路に入った。雅子の家がどこなのかは、訊かなかった。料金所

で、雅子はちよつと戸惑^{とまど}つたようだったが、私に促されるまま小銭を出した。

いきなり、スピードをあげた。

二速の引っぱりがすさまじい。一瞬にして百キロ近くまで昇りつめるという感じだ。この車を買ったばかりのころは、シートに背中を押しつけられる感触がなんとも言えなかった。

三速で百四十キロを超える。タコメーターの回転数を読みながら、私はシフトアップしていった。四速で百七十キロ。五速にあげると、エンジン音は多少静かになった。

「びっくりした。声も出なかったわ。すごい加速なのね」

「日本じゃ、走るところがないんだ」

「なんていう車なの？」

「マセラッティ・ビトゥルボ」

女を誘うのに適当な車ではなかった。スタイルは目立たない。エンジンのパワーが、この車の特徴だった。女をなんとかするために車を転がそうなどとは思わなかった。そういう歳でもない。

「俺^{おれ}の女になりな」

甘い口説き文句も、好きではなかった。正面から切りこむ。それで駄目な場合は、諦^{あきら}めるだけだ。クスリ、と雅子が笑った。

「今夜だけって言葉が、最後につくんでしょ」

「今夜だけかどうか、付き合ってみてからだ」

「がっかりするわ、きつと」

踏みこんだ。前に行く車が、後方に飛ぶように遠ざかっていく。百八十。

「怖ろ」

雅子が低い声で言った。ビトゥルボにはまだ余力がある。スロットルを閉じた。静かに減速していく。

「いつも、こんなふうにして女の子を誘うの？」

「決めちゃいない。酔っ払って、道端で抱きつくこともある」
それきり、雅子は喋らなかつた。私は再びスピードをあげた。

3

時々、雅子の部屋に行くという日々がはじまつた。

横浜の運河に面したところにある、小さなマンションだつた。

部屋は四階で、いつ訪れても掃除したてのように整っていた。淡い藤色の絨毯、木製のキャビネット、小さなテーブル、ベッド。カーテンは女の子の部屋によくある花柄などではなく、直線的な幾何学模様だつた。

部屋では、いつもコーヒーを飲んだ。食器類は少なかつたが、どれも凝っていた。縫いぐるみひとつ見当たらぬ。小さなバスルームも清潔で、バスタブに水滴がついているのさえ見たことがなかつた。

ベッドに横たわっていると、必ず部屋の隅から圭太郎が見つめていた。猫である。大人しい猫で、大抵は部屋の隅の籠の中で丸くなっていた。

「週に一度は、お風呂に入れてやるの」

白い圭太郎の毛並みが、汚れていたことはなかった。よう、と部屋へ入るたびに私は声をかけた。私には、あまり馴れなかった。抱きあげて押さえているとじっとしているが、手を放すと膝から飛び降りて籠の中に戻った。コーヒーを飲んでいる時は眠っているようでも、ベッドに入ると必ず頭をあげるのだ。雅子があげる声が、そうさせているのかもしれない。

「妬いてやがるな、圭太郎のやつ」

「お爺さんよ、もう。そうでもないか。あたしが十八の時に拾ってきたんだから」

六歳の猫が、人間なら何歳に当たるのか、見当もつかなかった。子供のころに飼った犬をひどい目に遭わせてから、私は動物と親しくなることを避けるようになっていたのだ。人を裏切った時よりも、動物を裏切った時の方が、心にこたえるものだ。

雅子の躰は反応が鋭くて、しばらく私を飽きさせなかった。それに、扱いやすい女だったのだ。我儘を言うことはほとんどなかったし、金の面で負担をかけられることもなかった。手持無沙汰で私が圭太郎をからかったりしている時、咎めるような視線を投げてくるだけだった。

「遊びを知らんな、こいつ。閉じ籠めて飼ってるからだ」

「いいのよ。外の空気を知れば、こんな部屋には帰ってこなくなるわ」

「猫ってやつは、番犬にもならんぜ」

実際、圭太郎は私がちょっと荒っぽく扱っただけで、籠に逃げ返り、耳を伏せてしまうのだ。一度だけ、圭太郎が毛を逆立てて牙を剥いたことがある。私が骨を持ってきた時だ。

友人に、骨の絵ばかりを描いている画家がいた。その男のアトリエで、大きな動物の頭蓋骨を見たことがあった。飾り物にちょうどよさそうに思えたので、譲ってくれと私は言った。モチー

フだから、ここ一年は手放すわけにはいかない、とその友人は言った。描き終えたあとは、細く砕いて庭の薔薇の肥料にするつもりだ、とも言った。骨の持つ栄養で色づいた薔薇を、また絵にするのだと言っていた。

諦めずに、しつこく食いさがった私に、友人はどうやって骨を手に入ればいいのか教えてくれた。

肉屋に頼んだ。しばらくして電話があり、出かけていって包みを受け取った。大きな、ずっしりと重い包みだった。家へ帰って包みを解いた。

皮を剥がれ、肉を削ぎ落とされ、耳も眼もない醜怪な牛の頭が出てきて、私をたじろがせた。庭に深い穴を掘った。八か月、埋めておいた。夏が終ったところ掘り返すと、肉はすべて消えてしまつて、骨だけになっていた。きれいに洗つて泥を落とした。

まだ青白い、いかにも生きていた物を感じさせる、なまなましい骨だった。

圭太郎が見たのは、その骨である。

「ひと月ばかり、屋根にでも載つけておけよ。それで野晒しの骨みたいになる」

骨の生々しさに閉口した私に、画家の友人はそう教えてくれた。実際ひと月ほど風雨に晒していると、骨は淡い象牙色に変り、野で果てた野生動物の骨のようになった。

いまでも、私の家の応接間の片隅で、空洞の眼を来客にむけている。

「圭太郎をもう怕がらせないで」

それがあつてから、雅子が言った。二、三日、落ち着きを失つたのだという。

「男か、おまえはそれでも」